
さよならの夏

紗子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならの夏

【Nコード】

N6409T

【作者名】

紗子

【あらすじ】

ケイと名乗る青年が、ある日冬の元を訪ねてきた。彼は冬にある頼みごとをするためにここを訪れたというが……。？ 妖怪とどうかよみがえりというか……。なお話です。切ないものを目指しました。 自サイトにも掲載

ちりんちりん、という風鈴の音と共に現れたのは、帽子を深くかぶった青年だった。

さよならの夏

「何でも願いを叶えてくれると仲間に教えて貰って、ここに来ました」

そう言うとその青年は被っていた帽子を取ると、自嘲的な笑いをこちらに向けた。こちら、というのは縁側に片足だけ曲げて座っていた着物姿の男 苳 の事を示す。彼は青年の方を向くと、困ったようににこりと笑った。

「何でもってというのは、大げさだなあ」

そう言うと苳は立ち上がり、青年の元へ歩み寄った。蒼色の瞳に、あまりきつくない金色の髪。それを際立たせるかのような白いYシヤツを着ていた彼は、端的に言ってしまうば美人であった。苳は彼に少々見とれた後、ポリポリと頭を掻くと右手を前に差し出して再び口を開いた。

「御代をくださいな」

すると青年はハツとしたようにポケットに手を突っ込み、そこから何かを取り出し苳に差し出した。その手の内にあったものを苳は大事そうに受け取ると、縁側を離れ青年を奥の部屋へと促す。青年が御代として苳に渡したのは、山奥の川辺にある小さくて綺麗な石ころだった。

「で、お前名前は？」

「ケイといいます。貴方は苳さんでしたよね？」

「よく知ってるな。あと、堅苦しいのは苦手だから普通に話してくれ」

「解った。……友人が話していたんだ。以前君に助けてもらったことがある、とね。」

それで今回、僕もここを訪ねてみたんだ。静かでいいところだね」

「だろう？　ここならあまり邪魔も入らないし、風通しもいいから気に入っているんだ。」

たまに邪魔者が来るけれど、まあそれもいい暇つぶしだ。それでその願いつていうのは何なんだよ？」

するとケイは何も言わずに縁側に出ていくと、木の枝を使って庭の砂に文字を書きはじめた。するすると手慣れたその行為は、もう何度もその字を書きつづったことがあるという事を明らかにしている。苳はその様子を口出しすることなくじっと見つめていたが、やがてそれが何者かの名前であると気が付くと、自分も庭に下りてまじまじとそれを見つめた。

「叶野唯……女の子の名前か？」

「そう、この子を探して、川のほとりに連れて来て欲しいんだ」

「探すって言ったって、どのだれか解らなきゃさすがに探し用が……」

「居場所は解っているんだ。ただね、僕は事情があって自分から会いに行くことができないんだ。」

だから、どうか君に連れて来て貰いたい。彼女にどうしても見せてあげたい景色があるんだ」

そう言っつて砂の上に書かれた名に視線を向けたケイを見て、

苳は小さな溜息を吐くと、小さな笑顔を作つて了承の意を表した。

「それで、いつまでに連れて来ればいいんだ？」

「今日の夜」

「今日!? じゃあもう行かなきゃならねえじゃねえかよ!

そういうことはもっと早く言えよなー!」

葵はそう言つとドタバタと音を立てながら奥の部屋に駆けて行き、引き出しから制服を引っ張り出した。少々皺くちやになってしまっているが、着れることには変わりなさそうだ。葵は急いで着物を脱ぎ、てきぱきと制服を身に着け始める。久々に着るYシャツをきついと感じなかったこと少々落ち込みながらも、彼はキュツとネクタイを締めた。

「葵も学校に行くんだ?」

「ん? ああ、前は行つてたんだ。今はもう行つてない。

さすがに着物で街中を出歩く勇氣はねえから取つておいたんだ」

「そっか。そう、それで、唯の住んでいる場所なんだけれどね……」

そう言つてケイは彼女の家の住所を葵に教えると、大急ぎで家を出ていく制服姿の男を手を振りながら見送った。しかし、その顔に笑顔なんてものは、決して浮かんでいなかった。

「君が、唯ちゃん?」

友人とジャングルジムで遊んでいたところ、その声を掛けられ、唯と呼ばれた少女はぼかんとしながら声の主に目をやった。葵はその目の前に居る少女を見て、小学生だったとは……と思いつながらも彼女との距離を縮めていく。しかし唯と共にいた女の子たちが不安そうに自分を見つめているのを知ると、葵は苦笑しながら手に隠し持っていたそれをぱつと出して見せた。

「じゃーん、風船。今からここにいる皆のリクエストにこたえて、

お兄さんなんでも作っちゃうぜ」

我ながらキャラが合っていないと思いつながらも、満面の笑みで菱がそう言えば、暫く呆気にとられていた女の子たちも笑顔になり、「犬!」「鳥!」などとリクエストを投げつけるようになった。言われるがままに凄まじいスピードで風船を捻じ曲げていくと、少女たちは嬉しそうにそれを受け取り、菱を称えるのだった。そんな中、小さな声で「蛭」と注文した唯の願いは、他の子達の笑い声にかき消されて、菱の耳に届くことはなかった。

一通り技を披露した後、他の女の子たちがぞろぞろと帰っていくのを見送ってから菱はようやく唯とまともに会話をすることができた。彼女は小学三年生で、親は共働き。家には10時までに帰れば親に見つからない、とのことで好都合ではあったが、何だかそんな唯が可愛そうになった菱はぼん、と彼女の頭の上に手を載せた。

「俺が楽しいところに連れて行ってやるよ」
まるで誘拐犯の吐くセリフだな、
と苦笑しながらも菱は唯の小さな手を握るち、ケイの待つ川辺へと仲良く歩き始めたのだった。

時刻は7時近く。歩きつかれた唯を負ぶって、菱は息を切らしながら山道を歩いていった。女の子とはいえ、小学生の体重を侮っていたようだ。ぎっくり腰にでもなってしまうような自分の背を気遣いながらも、ゆっくりと川のほとりへと向かっていた彼は、きよるきよると依頼主の姿を探し始める。すると、山に入って一時間程した頃にひょっこりとケイが姿を現した。

「随分と重そうだね、大丈夫?」

「お前が変わるか?」

「そうしたい気持ちは山々なんだけど、遠慮しておくよ」

そう言っ苦笑したケイは愛しそうに唯の寝顔を見つめると、川のほとりまで二人を案内していった。

「唯、起きてみる」

そう誰かに声を掛けられ、唯は重たい瞼をゆっくりと開いた。最初に目に入ったのは真つ暗闇で、その次は……。

「ほたる！」

蒼白い光が川の水を照らしていて、まるで幻想世界に迷い込んだかのようなだった。唯は先ほどまで眠っていたのを忘れたかのように目をぱちぱちと開いて、その光景に見入っている。綺麗、の一言では言い表せないその景色にすっかり惚れてしまったようだ。

「じゃあケイ、俺の仕事はここまででいいか？」

そう言つて隣に居る男に苳が話しかければ、ケイは寂しそうに笑顔を作る。泣きそうになっている彼を見て一瞬ぎよつとした苳は、次に唯が発した言葉を聞くとさらに目を見開いてケイの方を振り返った。

「お兄ちゃん、誰とお話ししてるの？」

しばらく誰も居ない暗闇と向き合った苳は、何かを悟ったかのように顔を歪めると、唯に心配を掛けまいと作り笑いをして彼女の隣に座った。唯を挟むようにしてケイも隣に腰をおろす。

「私ね、ほたるがずっと見たかったの」

「？」

「私のお兄ちゃん、2年前に病気で死んじゃったの。でも、居なくなる前に言ってた、必ずほたるになって会いに来るからねって。たぶんね、この中のどれかが、お兄ちゃんだと思うの」
そういつて嬉しそうに、しかし溢れそうになった涙をこらえて笑う唯を見て冬は「そっか」とだけ呟くと、二人で暫く蒼の世界に浸っていた。やがて睡魔に耐えきれなくなった唯がことん、と冬の左腕に体重を預けると、彼は唯が倒れないように抑えながら立ち上がり、ポケットから取り出したポシエットを首にかけてやった。その間も、ケイは決して感じ取ってもらおうことのできない手で、彼女の髪を撫でていた。

翌朝、ケイが再び冬の元を訪ねてきた。昨日はありがとう、とだけ言いに来たらしかかったが、冬が奥に招き入れるので少々戸惑いながらも家の中に足を踏み入れた。

「唯は、妹は、ちゃんと家に帰せた？」

「おうよ、俺が25キロの彼女を背負って走って行ったおかげで9時半には戻ったぜ」

「よかった」

そう言くとケイはほっとしたのか、笑顔を浮かべると安堵の息を吐く。

その表情からはもう、切なさなど感じ取れなかった。

「もう行くのか？」

そう言って今度は冬が寂しそうに笑うので、ケイは少し可笑しくなっつて「ふ」と息を吐き出した。

「そうだね、僕にはもう時間がないんだ。

せめてほかの仲間に君の事を教えてやりたかったけれど、それも無理そうだね」

冬と冬透き通っていくケイの体をぼうつと見つめながら冬は口を開く。

「なあケイ、唯は、お前に会えたって事、ちゃんと解ってると思う。俺が渡したあの石ころも、きつと大事に取って置いてくれると思うぜ」

荻がそう言っただけで虚しそうに笑うと、ケイはハツとしたような顔になった。

「あのポシエットに入っていたのはそれだったのか……」。

「参ったなあ、それじゃあ僕は君に返せるものが何もないじゃない」
そう言っただけで笑いながら手に持っていた帽子を頭に載せると、ケイは最後に何度も何度もお礼の言葉を述べて綺麗な青空に消えて行った。着物の男はその様子を暫くの間見ていたのだが、やがて全てが夏の自然にとけて見えなくなってしまうと、昨日まで着ていた制服をコインランドリーに持って行くための準備をし始めた。ちゅんちゅんと鳥の鳴き声が聞こえ、それにこたえるかのように木々がさわさわと音を立てる。彼は草履に履き替え外に出ると、青空を見上げて微笑んだのち、山の下の方へと姿を消したのだった。

「おやすみ、螢^{ケイ}」

その一言を、夏の空気に残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6409t/>

さよならの夏

2011年8月2日01時55分発行